【論文】

農村における幸福度の評価と分析

廣政幸生・長尾真弓・中嶋晋作
(明治大学農学部)

An Analysis on Evaluation of Happiness in Rural Area

Yukio HIROMASA(Meiji University)
Mayumi NAGAO(Meiji University)
Shinsaku NAKAJIMA(Meiji University)

A degree of happiness may be measured as an index of QOL although depending on subjective judgment. Most economists discuss it from macro-economic view point but few have examined it at regional or rural area levels. This paper aims at clarifying to what extent rural residents feel happiness and for what reasons. A questionnaire survey was conducted for 53 farm households and 70 non-farm households in Yuza town of Yamagata prefecture. Happiness was questioned on four items: an overall happiness, pleasure of life, sense of achievement in life and life satisfaction. 16 questions were asked regarding life satisfaction and in addition to 3 items for

others. Multivariate analysis methods (PCA and probit regression) were used for analysis. Major observations are 1) the residents in this area seem to feel relatively happy, 2) Overall happiness is higher in farm households than non-farm households, 3) so is for the satisfaction on quality of life, inter alia, rural life, 4) happiness is higher in producers of rice for feed than other farm households, 5) happiness correlates to household income and own property in non-farm households and 6) Overall happiness is influenced by other three happiness factors, amenity and satisfaction of income.

1. はじめに

我が国においてデフレ時代の閉塞感を反映してか、幸福についての関心が高くなっている。特に、ブータンのGNH (Gross National Happiness) に注目が集まって以来、より高くなったと言えよう。GDPなどの経済指標に替わりうるような豊かさ指標については、かつてのNNW(Net National Welfare)など、日本においてもいくつか行われてきたが、マクロ指標として認知されたとはいえず、普及はしなかった。近年、幸福度及び

生活の質(QOL)に関する指標作りはフランスなどで試みられ(J.E.Stiglitz, A. Sen and J.Fitoussi [8])、日本では内閣府社会経済総合研究所などでなされている¹⁾。幸福はヒトの生き方に深く関与するために、古代ギリシャ以来、哲学や倫理学を中心に研究成果は非常に多数あるが、社会科学からのアプローチは新しく、1970年以降に始まり、本格的に取り組むようになったのは1990年代後半だとされる(D.Boreck [1], B.Frey [3])。幸福度は主体が感じる幸福の主観的評価に他ならない

ために、本来、ミクロ指標であるはずだが、社会科学、特に経済学では GDP に比類するようなマクロ指標として扱われ、マクロ的に分析されてきた。よって、地域性を考慮するにしても、都道府県レベルであり、地方や農村を対象としたものは殆どみられず²⁾、分析も行われてこなかった。また、農業者あるいは農家を対象とする分析もなされてこなかった。

本研究は、これまでの社会科学分野からの幸福度研究の成果を検討し、農村（具体的には、農村部の農家及び非農家）を対象として、幸福に関わる諸項目について検討し、それに基づくアンケート調査を実施、実態の評価と分析を行う。主眼は、農村、農家は幸福をどのように評価しているのか、幸福なのか不幸なのか、その要因は何かを探ることである。

2. 指標の選択

日本において社会科学、とりわけ経済学の観点から幸福度、生活の質（QOL）を研究し、成果を公刊しているのは、大竹他[6]、猪口・SHIN[4]、橋木[7]であり、また、海外の代表的な幸福研究で日本に紹介されているのはFrey[3]であろう。いずれも幸福度は主体の主観的評価であるとの考えから、主体が行う総合的な評価を幸福度としている。代表的な質問形式は「あなたは、総合的に見てどの程度、幸せだとおもいますか、非常に幸福を○点、最も不幸を○点として、評価をして下さい」と、主観的評価点を段階で付けるものである。幸福はきわめて主観的な個人評価であって、個々の様々な状況に左右されるために客観化が困難であることは長年の関連研究が示している通りであり³⁾、結局は、このようなダイレクトな質問に落ち着いているといえよう。国内外において幸福度を継続的に調査している国民選好度調査、世界価値観調査、アジア・バロメーター⁴⁾なども同様の方法を採用している。よって、本研究で採用する総合的な幸福度の質問形式も同様のものとし、評価段階は、非常に幸福を5、最も不幸を1とする5段階で尋ねることにした。

また、生活の質に関して、生活満足度を幸福度に類似するものとして捉え、その要因等を分析し、

あたかも幸福度と同じ解釈をしている文献も見受けられる⁵⁾。しかしながら、D.Kahneman[5]は、認知心理学、行動経済学より、生活満足度は経験する自己の幸福計測値とは別物であると批判し、幸福は自己の目標を考慮すべきと述べている。生活水準が高くても、個人的な様々な理由によって幸福感に結びつかない場合があり、逆のケースも、十分にあり得る。個々の幸福感は多くの要因から影響を受け、生活満足度（生活水準）とは必ずしも一致しないからである。猪口・SHIN[4]は、これまでの幸福研究について、哲学をも含んだサーベイをし、哲学的解釈を考慮した上で、幸福は「楽しさ」、「満足」、「達成感」が主要な要素になるとしている。

このような研究成果を踏まえ、生活満足度は幸福度そのものとは別だとするが、生活の質を評価する上では欠かせない項目である。そこで、主観的な総合的幸福度の評価に次ぐものとして、幸福感を形成する要因を、①人生を楽しんでいる程度、②人生における達成度の程度、③自分が感じている総合的な生活水準の程度として、それぞれ、「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5段階評価とした。

生活満足度の項目選択については、猪口・SHIN[4]を参考にした。そこでは生活分野を5領域（個人的生活領域、対人的生活領域、物質主義的生活領域、非物質的生活領域、公的生活領域）に分け、領域ごとに項目を複数設定し、総項目数は16である。但し、対象はアジア各国であり、アンケート結果もマクロデータとして取り扱っている。本研究では、一国よりは地域であることを考慮し、以下の16項目を設定した。住居、家族、友人、健康、仕事、世帯収入、余暇、精神的ゆとり、食べること、近所、集落（自治会）、治安、自然環境、社会福祉、住みやすさ、結びつきである。それぞれ満足の程度を5段階で尋ねている。

その他関連指標としては、幸福度に影響を与えるであろうと思われる指標を検討した。当該地域に対して好感を持つのは、なんと言っても地域への愛着があるからである。地域に対して拘りを持つことは、幸福度を高めると考えられる。質問項目としては、他人に紹介できる地域自慢の程度と

した。また、あるならば、内容について具体的に記述することとした。農家の幸福感は農業をすることに対する意識に左右されるであろう。そこで、農業の意義及び職業としての意識について、「収入源として」、「つらいもの」、「楽しいもの」、「生きがいがあるもの」、「自然と共生するもの」、「教わるもの」、「惰性的なもの」、「生涯働けるもの」の8項目を設定し、自分の考えに該当する項目を複数選択することとした。幸福は個人の主観によって判断されることは既に述べた。個人が幸福をどう感じるかは、主体自身の性格にある程度拠っていることも容易に理解される。性格を判断する指標として、信頼しやすさの程度と危険回避の程度の質問項目を設定した。

次に、これまでの研究が示しているように、幸福度に影響を与えるのは、主体を取り巻く環境、デモグラフィック指標である。本研究では、農家に関して、①世帯収入（兼業を含む）、②世帯構成の数、③年齢、④農家の状況を示す指標。非農家に関しては①世帯収入、②世帯構成の人数、③年齢、④住居年数、⑤資産評価を設定した。回答の仕方は、資産評価のみ5段階評価値とし、その他はそれぞれの状況に応じた区分評価値とした。

3. 調査概要

農村地域として山形県遊佐町を選択し、農家と非農家を対象とした⁶⁾。調査日時は2012年10月下旬である。農家に関しては、市街地から離れた7集落にある全ての農家(73戸)を対象としたが、調査拒否、不在もあり、53戸についてアンケートの配布と回収を行うことができた。調査方法は訪問調査であり、経営概況調査と併せ調査員が聞き取りを実施した。非農家に関しては、JR駅前から南東方向に位置する市街地を対象にして、4町内会200戸にアンケートを配布し、郵送による回収とした。回収できたのは72(回収率36%)、うち有効は70であった。よって、農家53、非農家70の計123を分析対象データとした。

簡単にデータの概要について示す。まず、回答者の男女別では、農家は男が100%である。これは、アンケート調査を農家経営概況調査に併せて実施し、聞き取りを経営主または世帯主としたた

めである。回答としては偏っていると言わなければならない。非農家については、男53%、女47%となっており、ほぼ妥当な比率である。次に、年齢別では、農家に関しては経営概況調査の方で実年齢を聞き区分をした。40歳台6%、50歳台26%、60歳台36%、70歳台24%、80歳以上12%である。先と同様に、調査対象者を経営主または世帯主としたために、高齢者に偏っている。非農家については、年代別の回答とし、20歳台3%、30歳台4%、50歳台22%、60歳以上61%であった。非農家も高齢者が多いことが分かるが農村の高齢化の一端を示しているともいえる。よって、以下の分析では、男女別の比較は非農家のみを対象とし、年齢別の分析はなるべく避けることにした。

4. 分析

1) 総合的幸福度及び幸福要因

表1に、「総合的な幸福度」及び幸福の3要因とした「人生を楽しんでいる程度」、「人生を達成した程度」、「生活水準の満足度」の回答結果をまとめた。全体の平均値及び農家、非農家別の平均値である。平均値の検定は農家と非農家で行った。全般に、平均得点は高いように見え、人生を楽しむこと、人生の達成感が高いとする一方で、生活水準の評価はそれらに比べ低い⁷⁾。農家、非農家別に見た場合、「総合的な幸福度」、「人生を楽しんでいる程度」、「人生を達成した程度」では農家の方が、有意に値が高い。特に、後2者においては明らかに差があり、農家の方が、幸福感が高いことを示している。そのまま読めば、人生の満足度がより高いということになる。

表1 幸福度指標の平均値

	総合*	人生***	達成**	生活水準
全体平均値	3.87	3.90	3.86	2.98
農家(平均値)	4.00	4.13	4.00	3.04
非農家(平均値)	3.77	3.74	3.75	2.93

註: *は10%、**は5%、***は1%の有意水準を示す

次に、表2は非農家のみの男女別の平均値を示している(農家については省略)。男女別では、有

意な差があるとは言えないが、全ての項目において女性の方が、幸福感が高い。この結果は、これまでの多くの研究で、女性の方が幸福感をより感じているという結果と整合的である。

表2 幸福度指標男女別平均値

	総合	人生	達成	生活水準
男	3.74	3.62	3.73	2.89
女	3.90	3.90	3.77	3.00

2) 生活水準の諸項目の評価

表3は、生活満足度指標の16項目と地域自慢の質問について、農家、非農家ごとに平均値と標準偏差を算出したものである。検定は平均値の差について示している。

農家の方が非農家に比べ、全ての項目において満足度が高く、生活全般に渡り、農家の方が満足していることが窺える。また、有意差がある項目のうち、「近所」、「集落」、「住む」、「自慢」は市街地よりは周辺の農村らしい住環境の方をより満足していることを、「友人」、「仕事」、「余暇」、「精神」、「食べ物」はどちらかというと農業という職業によってより特徴付けられる満足度と考えられる。

3) 農家属性、非農家属性と幸福度の関係

経営概況・意向に関する調査結果と幸福度との関係を検討する。幸福度が所得や労働の状況に関連することは知られている。よって、稼得収入

等を通じて幸福度に関係すると予想されたが、農家の専兼別、経営規模別、農家収入との関連性は見られなかった。さらに、農家の属性として表4に示している項目について、当該農家であるか無いかで、幸福度の4指標の評価に差があるかどうかを検定したものである。遊佐町は生活クラブ生協、平田牧場と組み、飼料用米プロジェクトを推進しているのは周知の通りである。飼料用米に取り組んでいる農家のみ、幸福度が高いことを示しているが、その要因は不明である。生きがいと積極性が影響しているのかもしれない。後継者があり、積極的に生活クラブ生協と取り組み意向を示している農業者は人生の達成感が高い傾向がある。

次に、非農家の属性と幸福度関連指標との関係を見よう。幸福度に何が影響しているのか、因果関係を事前に判断することは難しい。よって、ここでは、属性（評価指標）と幸福度の4つの指標との相関関係をみるにとどまる。順位相関係数を算出した結果を表5に示した。収入が高く、資産の自己評価が高く、地域で自慢できるものがあると感じるほど、幸福度も人生の達成度も生活水準の満足度も高い評価となっている。また、資産評価のみ人生の達成感と関連している。単純化して言えば、資産を持ち、収入があり、地域に愛着があれば幸福になると言えるかもしれない。

表3 生活満足度の平均値

		住居	家族	友人**	健康	仕事**	収入	余暇**	精神**	食べ物**
農家	平均	3.58	3.72	3.75	3.28	3.51	3.17	3.53	3.45	3.83
	標準偏差	0.86	0.89	0.83	0.89	0.80	0.83	0.82	0.87	0.88
非農家	平均	3.42	3.49	3.43	3.11	3.14	2.99	3.20	3.06	3.49
	標準偏差	0.88	0.86	0.67	0.83	0.73	0.77	0.69	0.79	0.79

近所***	集落***	治安	自然	福祉	住む**	結びつき	自慢***
3.69	3.50	3.67	4.04	3.29	3.79	3.38	3.76
0.73	0.74	0.79	0.84	0.70	0.87	0.66	0.90
3.07	3.08	3.56	3.90	3.10	3.39	3.03	2.51
0.64	0.44	0.67	0.74	0.68	0.87	0.51	0.80

註：*は10%、**は5%、***は1%の有意水準を示す

表4 農家属性と幸福度（差の検定結果）

	総合	人生	達成	生活水準
エコファーマー	—	—	—	—
認定農業者	—	—	—	—
共同開発米生産者	—	—	—	—
飼料用米生産者	△	*	—	**
後継者有り	—	—	△	—
拡大意向	—	—	—	—
積極的取組意向	—	—	*	—

註：△は15%、*は10%、**は5%の有意水準を示す

表5 非農家属性と幸福度（順位相関係数）

	総合	人生	達成	生活水準
収入	0.401**	0.374**	0.257	0.467**
資産	0.367**	0.459**	0.370**	0.425**
自慢	0.314*	0.455**	0.241	0.245*

註：*は1%（両側）、**は1%（片側）の有意水準を示す

5. 幸福度への影響要因

これまでの幸福度に関する経済学からのアプローチでは、幸福度に影響を与える様々なデモグラフィック要因について検討している。幸福の決定要因の解明を目的としているからである。そこでは、例外なく、方法として、幸福度を被説明変数とする回帰分析が行われており、幸福度が2で述べたような順序データなので、順序プロビット法が採用されている。本研究においても、同様の分析手法を用いる。

幸福感に影響を与えるデモグラフィックな要因が何であるかを先験的に判断することは難しい。はじめにで述べたように、これまでの研究よりある程度推測がつくものの、それはマクロの立場からの判断である。そこで、以下のような分析手順を経た。まず、プロビット法ではなく、通常のOLSのステップワイズ法で説明変数を選択した⁸⁾。次に、選択された説明変数を用いて、順序プロビット法を適用した。

投入する説明変数は、幸福要因指標、生活満足度の指標、デモグラフィック指標及び性格指標である。但し、幸福要因に関する3つの指標、「人生を楽しんでいる程度」、「人生を達成した程度」、「生活水準の満足度」は、相互に相関関係を持っており、そのままでは多重共線性の問題が発生するた

めに、主成分分析によって合成変数を作成した。表6に示したように寄与率、因子負荷量の大きさより第1主成分を3変数の合成変数とすることができる。分析対象は全サンプルであるが、欠値があるケースを除外したために、サンプル数は114である。

計測結果は、表7に示した通りである。ステップワイズ法による変数選択を経ているので、有意な変数のみである。これまでの研究に比べ、幸福度に与える要因の数は少ない。これは、サンプル数の少なさ、農村という比較的均一な地域を対象としていることから生じているのかもしれない。

統合化された幸福要因は幸福度に強い影響を与えており、幸福指標を作成する際に検討したことが例証されている。その他は、住みやすさの評価と収入の評価であり、いずれも生活満足度の主観的評価値である。住むという総合的な住居環境と所得に関連する収入への評価が幸福度に影響を与えていることが示され、幸福を形成する社会・経済的な要因としては妥当だと判断される。

表6 幸福要因の主成分分析

	主成分1の 因子負荷量
人生	.722
達成	.835
生活水準	.741
寄与率(%)	58.96

表7 幸福度の影響分析（順序プロビット法）の推定結果

変数	幸福要因	推定値	標準誤差	Wald	
	住みやすさ評価	1.267	.302	17.578	***
	収入評価	.707	.372	3.600	**
	[cut point= 1]	2.002	1.211	2.734	*
	[cut point= 2]	7.688	1.444	28.356	***
	[cut point= 3]	10.642	1.709	38.797	***

註1) McFaddenの疑似R²: .374

註2)*は10%、**は5%、***は1%の有意水準を示す

註3) WaldはWald統計量を示す

6. おわりに

本研究においては、これまで、殆ど分析をされてこなかった農村を対象とした幸福度について、指標作成の検討をした後、アンケート調査を実施、

その結果をもとに分析を行ってきた。得られた結果は以下の通りである。

第1に、分析対象農村の総合的な幸福度は比較的高いと思われる。総合的な幸福度及び幸福を成す3つの要因は、農家の方が非農家よりも高い。

第2に、生活満足度についても、全般的に農家の方が非農家より満足度が高い。特に、農村部特有の近隣関係や農業を営むといったことについて顕著である。

第3に、農家に関し、属性（経営規模、専・兼別など）及び世帯収入は幸福度に影響しないが、飼料用米作付け農家は幸福感が強い。しかし、その要因については不明である。

第4に、非農家に関し、幸福度と世帯収入、自己資産評価との間に関係がある。

第5に、総合的な幸福度に影響するのは、幸福構成要因及び住みやすさと収入であり、暮らしていく上で基本的な事柄である。

第6に、地域が持つ資源の評価（自慢できるかどうか）は幸福度に関係している。

以上の本研究の分析結果は暫定的である。既に述べたように、農村の高齢化が進んでいるとはいえ、高齢者に評価が偏っているからである。また、分析結果が農村全般的に特徴的なことなのか、それとも分析対象地域特有の状況を反映しているのかの判断は、サンプル数だけでなく、他地域を含めたさらに多くのデータを集め検討する必要がある。

註

1) 内閣府、幸福に関する研究会：
<http://www5.cao.go.jp/keizai2/koufukudo/koufukudo.html>

2) 大竹他〔6〕では、職業別で農林水産業はあるが、サンプル数は少ない。橘木〔7〕も同様である。地方とは言えないが、東京都荒川区のGAHの取組がある。

3) D. Bok〔1〕、B. Frey〔3〕、猪口・SHIN〔4〕にサーベイと考察がある。

4) 以下のHPを参照にされたい。

<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/senkoudo.html>

<http://www.worldvaluessurvey.org/>

<https://www.asiabarometer.org/ja/profile>

5) D. Bok〔1〕、B. Frey〔3〕。

6) 遊佐町の概要：人口15480人、世帯数4608、高齢化率32.8%、農業就業者率16.8%

7) 直接的には比較できないが、国民生活選好度調査（内閣府：2011）では、個人平均6.4（11段階評価）となっている。

8) 計測には、SPSS Statistics 19を用いた。

引用・参考文献

〔1〕Derek Bok, “The Politics of Happiness” Princeton University Press, 2010、（土屋直樹他訳『幸福の研究』東洋経済新報社、2011）

〔2〕Carol Graham, “HAPPINESS around the world” 2012, OXFORD

〔3〕Bruno S. Frey, “Happiness A revolution in Economics” Massachusetts University Press, 2008、（白石小百合訳『幸福度をはかる経済学』NTT出版、2013）

〔4〕猪口孝・Doh Chell SHIN 編『東アジアのクオリティ・オブ・ライフ』、東洋書林、2011

〔5〕Daniel Kahneman, “Thinking Fast and Slow” 2011、（村井章子訳『ファスト&スロー』早川書房、2012）

〔6〕大竹文雄・白石小百合・筒井義郎編著『日本の幸福度』、日本評論社、2010

〔7〕橘木俊詔『「幸せ」の経済学』岩波書店、2013

〔8〕J.E. Stiglitz, A. Sen and J. Fitoussi, “Mismeasuring Our Lives” The New Press 2010、（福島清彦訳『暮らしの質を測る』金融財政事情研究会、2011）

〔2014年4月24日受理〕